

## 仏教伝統の中の浄土真宗

アグネス・妙珠・エンジェスカ

ある夏の夜、光輪寺の電話のベルが鳴りひびいた。16才になる、親友の息子さんが得度修礼（僧侶になる儀式）を受けるための準備をしていて、あることをよりはっきりさせたいと私に尋ねてきたのです。お母さんがもう一方の電話で彼の英語を助けていました。

その根本的な質問とは「浄土真宗が他の伝統仏教と違うのか。」ということでした。16才という年頃は、人々が哲学的な問いに対して非常に真剣であるものです。年をとるにつれて、我々大部分のものは、日常のささいな出来事に対応しているうちに、一般に、自分の仕事やキャリアそして家庭のことがまず優先されてくるのです。現代は人々がいつも忙しくあくせくしていて、自分が何をどうするかを、ゆっくり考えるゆとりがないのです。むしろ子供達をさあ勉強しろ、さあ勉強しろとかりたてて、彼らの初めてで誠実な哲学的に人生に向かおうとする気持ちをうばいってしまう傾向があるのです。

時には、浄土真宗の僧侶でさえ、浄土真宗の伝えていることが特別なものだということを知らずに、キリスト教の救済や信仰と同じように、浄土真宗の救済や信仰を考えています。

だから、若い仏法の友の問いを聞きながら、私は出来るだけ最善の答を彼にしなればと真剣になりました。誤解をさけるために手紙でその質問に答えることを約束したのです。そして、ついに今日この手紙で彼に、この問題についてお話ししようと思います。

親愛なる裕君へ

以前、あなたに約束したように私はこの手紙を書きました。浄土真宗と他の伝統仏教の間には根本的な違いはありません。あらゆる仏教のゴールは同じ「さとり」です。さとりに到る道はおしゃかさまによっていろいろ示されていますが、それぞれ一つの道があります。

浄土真宗のさとりについては、阿弥陀さまの役割がとても大切です。その他の仏教では人間がさとりを実現するという事に焦点を当てているのです。もし人が呪術的な関心で教えを聞くならば、世間で言われているように、『浄土真宗では、阿弥陀仏の救いを信ずる以外、人間の成すことはない。一方、その他の伝統仏教においては、人間の力でさとりに到るので、仏は何も成すことはないのである。』というように理解します。

しかし、このような結論は、偽りであると言ってもいいほど浅いものです。残念ながら、このような考えは、仏教の行をやらず知的に仏教を理解し、自分の文化や教育的な考えにしばられている人々に、東西を問わず共通したものです。

我々の教団の人々は、浄土真宗の教えが非常に単純化されたために、約束された来世を簡単に信じたり、もっぱら仏の一方的な救済を受動的に信じるものを阿弥陀仏が一方的に救うのだというような、キリスト教的な考え方に人々がすぐに落ちこ

んでしまうのです。たといどんなに多くの人々が、無条件にすべてのものを救うという阿弥陀仏の一人働きだ、という気持ちの良いメッセージを信じたがっているとしても、このメッセージは偽りであり、仏法の誤解なのです。

確かに、浄土真宗のゴールは、他の伝統仏教と同様さとりにあり、仏と同じ心の状態をいうのですが、「浄土」はゴールではなくて、さとりにすすんでいく道なのです。親鸞聖人の和讃の中に、さとりという言葉が何度もくり返して述べられていることに留意してください。浄土というのは象徴的な言葉であり、心の状態を表しているのです。それは普通の人間に仏の知恵が与えられる特別な心の状態を言っているのです。念仏を称える過程において、人間の心が変わられ、仏の知恵が人間の心の中に入ってくる事が出来るのです。仏の心と人間の心とが互いに反応することを「信心」と呼んだのです。「信心」は死んだ人ではなく、生きている人の間に経験されることです。信心は自分自身と同じように周りの人々やものを、新鮮な、仏の目で見ることが出来るようにするのです。これは力強く、革新的で、とても楽しい経験です。

しかし信心の体験はたとい言語的な言い分があるとしても、信仰とも献身とも共通性はありません。信心が与えられた人は、その人の人生を非常に広く、違ったように見ることが出来ます。人間の我執の心をへらし、正しい選択が出来るようになるので、信心の人の生活はより楽に、意義深く、その一瞬一瞬が危なげのないものとなるのです。だから、信心の人は仏によって、生き生きと自分の生活に従事し、活気に満ちて、強くさとりを求めるように計られるのです。信心はその人の見解を大きく変えます。その人の周りで何が起ころうと、すべて貴重な機会であると受け取られるのです。

このユニークな信心の心が自分の周りを浄土と受け取らせ、仏法を明らかにするのです。だから浄土は七宝で作られていると言われるのです。信心はその人をはげしい激情から解放し、より貴重な幸せな選択をさせるのです。

信心は信仰とは違います。人間に与えられた仏の心はその人の周りを変え、人間に大切なものをすべて知らせるのです。

信心は念仏なしにはおこりません。仏の心が人間に与えられていく過程は、むしろ特異な現象です。このことは本願力によってのみ実現できるのです。そしてその本願力には、すべての衆生のために、阿弥陀仏によって集められ、ささげられた無量の功德が入っているのです。宇宙のあらゆるものは、ある種の法則（完全さ）を持っているのです。そしてその法則が、今の自分をあらしめ、必然的に未来を決定していくのです。我々はある環境のもとで物事を決定しているのであり、仏たりとも、この法則をやぶることは出来ません。我々の心の中に、仏が入り、その心を変えさせるためには念仏が必要なのです。

あなたが想像されるように、我々の心に仏が入るためには我々が心からそうなることを望まねばなりません。だから、ただ一声の念仏で信心に到るということは、ありえないのです。

念仏に会いたいと心から願う人は、真剣にさとりの経験をしたいと決心することです。そしてそのような人にだけ信心の心が与えられるのです。親鸞聖人は次のよ

うに説明されています。

- 一、あなたもお気づきのように信仰とか、信ずるということは人々の間でよくあることですが、信心がおこることは非常にまれなことです。
- 二、信心は仏さまからのたまわりものです。日々の生活経験からもわかるように、信心をたまわるには、その信心を与える側と信心を受ける側の両方が必要です。
- 三、信心とは、人間に与えられた仏の知恵（仏の心）です。
- 四、信心というのは、心からさとりを得たいと願い、その気持ちを育ててきた人が、念仏を行じることによって与えられるものです。
- 五、さとりを得たいという、そのような強い決心を育てていくためには、過去世において、いわゆる自力の行を、十分にうまく経験しているものです。というのは、さとりを得たいという純粋な願いは、人間の心に自然におこってくるものではないからです。自力の行とは、さとりを得ようという考えもなく、人間の意志でただ称えている念仏であるとみなされるかもしれません。そのような念仏では決して信心は与えられませんが、真実の幸福である、さとりにとって必要なものを育てるのです。

確かに、あらゆる伝統仏教の中には、名号（なもあみだぶつ）と阿弥陀仏についての教えがあります。しかし、いくつかの伝統仏教において、阿弥陀仏の趣意を、その教えのすみっこに追しやっているのは、人間の混乱と自我中心の見解によるものだと責められるでしょう。それぞれの伝統仏教の中でも、名号なしにさとりの経験を得るかもしれませんが、名号による信心というさはりとは、すでに不退の位にあるということが重要なのです。不退とは、その人が念仏の行の過程で本願力によって到達し、決してそのさとりを失うことがないということです。親鸞聖人および他の仏教界において、世界は十の境界に分けられています。

- 一、地獄・・・苦しみが最大である。
- 二、餓鬼・・・決してみたされることない強い激情でいっぱいのもの。
- 三、畜生・・・本能のままに動かされているもの。
- 四、人間・・・何をするかよく考え、又その行動を評価することもできるけれども、この世界は人間の感情によって強く左右されている。
- 五、修羅しゅら・・・そこでは、ねたみ心が最も強く、争いのたえないところである。
- 六、天人てんじん・・・そこでの生活は、とても楽しいものであるが、この天人の世界が永遠に続くものではなく、すぐにも離れねばならないことが強い苦しみである。
- 七、声聞しょうもん・・・そこには仏の直弟子じきが住み修行している。
- 八、縁覚えんかく・・・そこでは自己のさとりのためだけに学び、修行している。
- 九、菩薩・・・自己のはからいがなく、あらゆる衆生の仏道成就のためにささげるすべての働きがそこには存在し、五十二段の位といわれる。

#### 十、仏

一から六までは娑婆しあばと呼ばれ、そこには共通して存在そのものの中に迷いと苦しみを引きおこすものがある。七から十まではさとりと呼ばれる境界であり、本当の知恵により、すべての心の徹底した進歩によって、又、苦しみをなくし、菩薩に導